



カンボジアの子どもたちに教育を

2010年1月 No. 32

カンボジア便り

幼稚園スクールバス運行開始

前回のニュースレターでお伝えしたとおり、ルセイサン小学校附属幼稚園の園児数増加を目的として、スクールバスを運営することとなり、11月2日付にて契約を無事締結し、バスの運行を開始しました。園児の安全確保の為にバスには毎朝・毎夕、学校の先生一人にも添乗して頂く形を取っています。

今年はスクールバスの提供を広く宣伝していた効果もあり、年度初めの段階では、園児の登録数は52名（昨年43名）と9名増加しています。実際にバスが運行を開始して約1ヶ月が経過した、11月末の段階では、定期的にしっかりと幼稚園に来ている園児の数は、25人前後（多いときは32人）となっており、こちらも昨年の16人前後から10名程度の増加となっています。その内5人の園児を除く全員がバスを利用しており、バスは毎日朝・夕2往復（多いときは3・4往復）

で運行しています。また、ルセイサン幼稚園では、園児の数が増えているので、現在クラスを一つ増やす予定で準備を進めています。この新クラス開始に向け、日韓アジア基金では、幼稚園側の要請に応える

形で、テーブルと黒板の寄付を予定しています。

これらの結果を踏まえまして、まだ1か月目だけの報告ではありますが、園児の数は昨年対比10名弱増加したものの、当初期待した程には増加していないという印象です。現地からの報告によりますと、年度初めの登録数に対して実際に登校している園児数が少ない理由は、大きく分けて二つあります。

～目次～

カンボジアだより

幼稚園スクールバス運行開始 1

不足教科書補填の成果と今後 2

年賀状宛名書きに参加して 4

インド人の人生観

地球人集まれ！

一日比谷公園でつながる友情 5

スタッフ紹介

違いを理解することが平和への近道

ービビンの会をめぐって 6

易しい「歴史の壁」の乗り越え方 7

事務連絡 8



ひとつは、親が収穫期のため田畑に出ており、子どもと一緒に連れて行ってしまふこと（こちらの理由は昨年も一番大きな要因として挙げられていました）、二つ目としては、11月は折りあしく風邪がはやっており、病欠が多かったことです。病欠は仕方のないこととして、現地においては、園児の数を今後一層増やす方策として、先生が家庭訪問したり、村長や学校の委員会から親に対して子どもを通園させるよう働きかけを行ったりしています。日本側では、今後風邪の流行という特殊要因がなくなることで、村長や先生方の啓蒙活動により、園児数が増加していくことに期待していききたいと思っています。

今後の方針としましては、このプログラムはとりあえず1年間は継続して行うことを当初から方針として決めておりますので、その間、引き続き通園する園児数の推移を見守っていききたいと思っています。その上で、当初の1年間の期間が終了した段階で、費用対効果など、総合的に検討してプログラムの継続か終了かを決定する予定であります。

また、幼稚園スクールバスプログラムを開始したことで、今後新たに検討が必要なことが出てきました。これまでのプログラムと違い、バスプログラムでは、極端な場合、人命にも関わる場合が想定されますので、カンボジア現地でのNGO登録が今後求められる可能性が出てきています。これは、現在カンボジアで施行された新たなNGO関連の法令も影響しており、現在、法令に関して調査すると同時に、登録に要する費用も念頭におきながら、今後の対応を検討していく予定です。

小学校不足教科書補填

前回のニューズレターでご報告の通り、ルセイサン小学校、ワット・ハー小学校、それぞれに合計570冊、827冊の教科書・教員用教材・辞書などを購入し寄贈しました。日韓アジア基金では、両校から本教科書プログラムとスクールバスプログラムについて、先生方から、



一人残らず教科書を持って授業を受けています。

その後の状況・今後の課題・改善点など、定期的に報告を受けています。支援者の皆様、日本のスタッフが現地の状況を正確に把握できるようにするという目的だけでなく、報告や提案を求めることで現地の人たちに、ただ支援を受けるだけで終わってしまうことなく、主体的に教育環境の改善に取り組む意識を持ってもらいたいと考えているからです。また、教科書補填については、今後、ル

セイサン小学校、ワット・ハー小学校に限らず、他のカンボジアの

小学校にも活動を広げていきたいと考えており、そのような将来の活動に向けて、活動の評価基準（教科書を補填することによって具体的に得られた成果や費用対効果）を日韓アジア基金としてしっかりと持っておきたい、そのためにも両校での教科書補填後の状況を把握しておきたいという意味合いもあります。

新学期が始まり、教科書を子どもたちに配布してから約2ヶ月強がたちますが、現地からの初回の報告によりますと、具体的な成果として以下のような点が挙げられています。

1. 月次の試験の点数は概ね70点～85点、四半期毎の試験の点数は80点～85点となりました。昨年までの比較では、明らかに向上しており、おそらく過去最高の成績だったと考えられます。

2. 子どもたちが以前に比べて文字をより上手に読めるようになっており、家で宿題ができるので、授業についていけないということが少なくなりました。家で教科書を事前に読んできているので、授業開始の段階から子どもたちが質問をするようになり、以前に比べて、先生に質問をするということ自体に抵抗が無くなっているようです。

3. 先生にとっては、子どもが予習をしてきているので、以前よりも説明が容易になりました。また、以前は先生が黒板に書いたことを子どもたちが全て書き留めなければならなかったのが、教科書があることで全てを書き取る必要がなく、授業を進行していく上での時間管理がしやすくなりました。全体的に、教科書があることで子どもの出席率も向上したと思われれます。



図書室で本を読む子供たち

以下は先生・子どもたちから、支援者の皆様へのお礼のことばです。（抜粋）

先生方 「日韓アジア基金の皆様が支援してくださった教科書や教員用教材は、授業で大変役立っており、心からご支援に感謝します。子どもたちの教育環境を一層向上していくよう、これからも日韓アジア基金と協力して努力していきたいと思ひます。」

子どもたち 「教科書を下さって本当にありがとうございます。支援してくださった皆さんに感謝しています。僕たち・私たちは前と違って、読むのが上手になりました。次の子どもたちのために綺麗に教科書を使っていきたいと思ひます。」

これらの報告を受けまして、スタッフ一同では、試験の点数が向上したという具体的な成果から、日々の授業の中で起きている前向きな変化まで、多くの具体的な成果が得られていることを大変嬉しく思っています。また、すぐに起きている良い変化だけでなく、現地の人たちの意識の中にも変化が見られることも大変大きな一歩だと思ひます。先生方のコメントの中には、教育環境の向上に向けて責任感が芽生えていることがわかりますし、子どもたちは教科書を次の学年の子どもたちが受け継いで長く使っていけるように大切に扱わなければならないということを感じているのがわかります。ともに、日韓アジア基金が教科書補填前に、リティさんを通じて伝えてもらった内容です。これらの状況を踏まえて、今後、リティさんを通じて、現地の他の小学校へと教科書補填の活動を広げていくことを徐々に検討していきたいと思ひておひます。（市井）

2009年12月27日（日）にアジア文化会館で行われた年賀はがき宛名書きボランティアに参加しました。同月に、論文のための視察も含めアンコールワットハーフマラソンのボランティアに参加したこともあり、日本にいなながらもカンボジアの子供たちのためにできることをと思い参加しました。慣れない都会の細道を進むと、ようやくアジア文化会館にたどり着きました。そこには高校生をはじめ、カナダの大学に通う方、企業にお勤めしている方などが参加しており、幅広いバックグラウンドを持つ人々との交流はとても刺激的でした。そして、やはり国際協力の団体のボランティアでしたので、その分野の勉強をしている方も多いように感じました。（わたしはいつもスポーツ系のボランティアで活動していたので、スポーツ好きの方が多かったです。）同じ興味をもつ人々と横のつながりを作れるということも、ボランティアの楽しさの一つだと改めて感じました。活動は、スタッフさんの適切な指示、はじめの自己紹介の盛り上がりもあり、いい雰囲気で行えたと思います。約2時間という短い時間でしたが、皆さん充実した時間を過ごすことができましたと思います。活動後のお茶会はさらにお互いのことを知るいい機会でした。趣味の話から将来のことまで、まるで初対面とは思えないほど、話が弾みました。その後、わたしはスタッフの一員となることになりました。今後は、スタッフとしてボランティアの方々を盛り上げていきたいと思ひます。

インド人の人生観

大西直美



12月の中旬に南インドのコーチン、西インドのプネーに行ってきました。南インドのカターカリダンスはラーマーヤナ、マハーバーラタを題材にしたケララ州特有の舞踊劇で、役柄によって原色で顔を塗り分け、目の動きを強調して演じられ、それは素晴らしいものでした。またインド滞在中、3回のヨガ体験もしました。日本で体験したヨガと違い、インドのヨガはヨガの精神をととても大事にしています。その考え方は万物にはそれぞれ力（神）が宿っており、自分も大いなる自然の一部であることを感じるというようなものでした。インド人の中にはヒンズーの精神、カルマ（業）の考え方が深く根付いており、背伸びをせずにそれぞれの与えられた人生を精いっぱい生きているという印象を受けました。わたしも自分自身に与えられたカルマ（カンボジアの教育に貢献していくこと）を受け止め、精一杯生きていきたいと思ひております。

地球人集まれ！ 日比谷公園でつながる友情

佐久間早苗

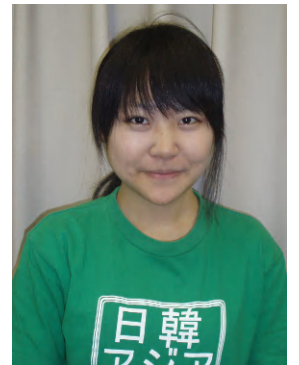
「何か国際関係のボランティアやろうかな」インターネットで見つけた新たな出会い、それが日韓アジア基金のボランティア募集ページ。グローバルフェスタ JAPAN 2009 への参加は、期待以上のものをわたしに運んでくれました。日韓アジア基金の活動を来場者の方に熱く説明することができ、たくさんの方の賛同をいただけたのは、ひとえにスタッフのみなさまの情熱を感じられたおかげだと思います。グローバルフェスタはそれぞれのブースで活気がみなぎり、すべてのブースを訪問するなら、とても2日では足りなかったと思います。日韓アジア基金ブースでは韓国人気にあやかり、ビビンの会を語ると来場者に説明がとてもしやすいシーンが多々ありました。また個人的にはNPO活動に関わりたい、その仕事をしたい、という目的意識を持つ方に会場内でたくさん会えたことは新鮮でした。2日目、嬉しいハプニングが起きました。用意された活動を説明するパンフレットが足りなくなり、募金してくださった方に渡すお礼の品がなくなるなど、全スタッフが最善の努力をした結果が出ました。

まだ足を運ばれていない方は、ぜひ来年度のグローバルフェスタで日比谷公園に広がる小さな地球を感じてほしいと願います。

スタッフ紹介

明治学院大学学生 松尾あさみ

わたしの日韓アジア基金との出会いは、運命的と言えるものでした。たまたま行ったグローバルフェスタでわたしは韓国に短期留学をしたことがあったので、自然に日韓アジア基金のブースに足が向きました。カンボジアの子どもたちの写真やスタッフの方の丁寧な説明で、「途上国への国際援助」に関心があったわたしはとても興味を持ち、その後ビビンの会やニュースター発送作業などに参加しました。去年の2月～7月まで韓国の大学で勉強し、帰国後、スタッフに誘っていただきました。以上が「日韓アジア基金」との出会いですが、ここからはわたし自身についてお話させていただきます。



わたしはアジアが好きで、アジア方面によく旅をします。そのたびに感じるのが「アジアの人はあったかい」ということです。（他の国の人に比べて、ということではありません。）韓国にも親切な方が本当に多いですし、「人が好き」な人が多いと感じました。わたしはまだカンボジアに行ったことがありませんが、大学を卒業する前に、一度は行ってみたいと思っています。そのときはあの子どもたちのきらきらとした笑顔を実際に見て、もっとカンボジアを身近に感じられたらいいなと思っています。時間ができたら、少しクメール語も覚えていきたいです。

わたしは今就職活動中で、「不況、不況」といわれている中、焦りを感じることもあります。しかし、そんな時こそ世界にも目を向けて、自分に今できることを一生懸命やっつけていこうと思っています。

違いを理解することが平和への近道

—ビビンの会をめぐって—

リーウエンカイ 会社員 マレーシア

日本に暮らして約 10 年、よく「日本好きですか？」と聞かれます。「好き嫌いというよりも日本での暮らしは当たり前で、それがまるで自分の一部のようにになりました」と答えます。家族の事情により、国に帰り長男としての責任を果たすことを決めました。その決断をしたとたん、寂しさと虚しさが重く心にのしかかっています。もしかしたら、日本が好きか嫌いかではなく、日本で暮らしている自分そのものが好きなのだ気づいたのかもしれない。



子供の頃から、周りの大人に第 2 次世界大戦の話聞かされ、自然と日本のことを嫌悪していました。しかし、日本の音楽や漫画文化に影響され、同時に日本に興味を持ち始めました。高校 2 年生のとき、学生交換計画でマレーシアに来た日本人と知り合い、思っていた日本人のイメージとは違い、自分たちとなんら違いがなく、喜怒哀楽を持つ人間であることを知りました。一ヶ月だけの滞在でしたが、とても良い経験と思い出を作ることができました。

ビビンの会に参加して、韓国からの留学生たちと知り合うことができました。まだ日本での生活に不慣れで、異なる文化に戸惑うかれらの姿が 10 年前日本に来たばかりの自分と重なって見えてきます。一人で生きていく不安、理解できない不満、分かってもらえない失望に打ちのめされた日々的一幕一幕が脳裏に浮かんで来ました。

「似ているから嬉しい、違っていても楽しい」というセリフをある番組で聞きました。ビビンの会に参加して、この言葉の意味を自ら体験して理解することができました。日本での常識が韓国では非常識であったり、またはその逆だったりします。マレーシアと照らし合わせても共通の部分もあり、異なるところもありました。それを知るのがとても楽しくて、同時に相手のことをより理解することができました。

人は動物と同じく本能的に違いを嫌い、拒みます。違いから偏見が生まれ、偏見が争いを生むとある本にそう書いてありました。わたしはその考えを否定はしません。しかし、違いを理解しあい、拒むのではなく、受け止めることこそ平和への近道だとわたしは考えます。それは動物と違って万物の霊長といわれる我々だからこそお互いの違いを理解し合うことができるのだと思います。ビビンの会でよく韓国と日本の違いを紹介されていますが、紹介されたところで何かが変わることが目的だとはわたしは思いません。そこに違いがあるのを知ってもらうことが一番重要だと思います。近くて遠い存在と言われている日、中、韓三カ国の距離を縮める一番の方法は、ビビンの会のように民間レベルで少しずつ氷を溶かすことが重要です。

やさしい「歴史の壁」の乗り越え方

キムヒスン（金喜淳）お茶の水女子大学院生

本コラムは30号「ハングル語って何語?」、31号「どうして日本が好きなの?」に続いて3回目（最終回）となります。まず韓国が好き日本人について、次に日本が好き韓国人について、主に歴史的な原因から書きました。最初何か書いてみないかと声をかけてもらった時は、貴重なニュースレターのスペースをこんなに長く頂けるとは思わず、なんとなく普段考えていたことを至らない言葉ですが、綴ってみたのです。こんなに反響があるとは思いませんでした。日韓両国の歴史観の違いについて貴重な意見も頂きました。「日韓の歴史の壁を越えて」という趣旨で設立された「日韓アジア基金」なので、そういった意見が寄せられることは本望であり、嬉しく思います。今日はいよいよまとめに入りたいと思います。

韓国で英語学校に通っていた時、好きな海外の国についてプレゼンテーションをする機会がありました。わたしはもちろん日本を選びました（笑）日本の地図や国旗をホワイトボードに描きプレゼンテーションを始めると、アメリカ人の講師は一番初めにこう聞きました。「日本の国旗の赤い色は血を象徴するのですか?」と。（原爆のことなど、色々突っ込みを入れたい方もあるでしょう。）お隣の韓国から、また遠いアメリカから、または世界から見れば、日本はどう映っているのでしょうか。それはきっと日本の中からは全く違う角度で見えてくるはずです。見栄えや外からの視線に注意しましょう、という話ではありません。いまわたしの声は、只今ニュースレターを手を取っている方々には目新しいかもしれません。聞き慣れない声はたいがい耳障りなものです。3回にわたって何が言いたかったかという、ただ、こういう声もあるよ、ということを知って欲しいのです。新しくて耳障りな声だけ聞いて欲しいのです。

少し話は変わりますが、西洋思想史の中で重要な流れを作っているもので「ポストモダニズム」という思想があります。これがとにかく難しく、多くの院生や研究者は毎日悩まされているものです（笑）ごく簡単に説明すると、「ポスト」は「以後の」という意味で、「モダニズム」とは、モダン modern、つまり近代です。「ポストモダニズム」とは、直訳すると「近代以後」です。近代以前の間は神や王様の権威に縛られていましたが、近代になって、人間は神からも王からも自由になりました。人間は自由に知を追求し、どこかに存在するはずの「真理」にたどり着ける、という風に考えるようになりました。しかし、神からも王からも自由になって、自由に知を追求して得た進歩したはずの知をもって、人間は恐ろしい虐殺や迫害、戦争を起しました。（ファシズム・第一次世界大戦）その徹底的な反省から、「近代」の考え方は見直されました。「近代以後」「ポストモダニズム」とは、唯一で固定された「真理」というものは存在しないし（だから、ニーチェは「神は死んだ」などと言ったものです。）、わたしたちの「知」はいつでも、その場の状況で作られている、というような相対主義的な考え方です。言い換えると、いま当たり前と思われる「知」の限界を意識し、常に疑い、常に新しい声を取り入れましょう、ということです。

今回少々挑戦的なタイトルを付けましたが、わたしは日韓の「歴史の壁」の乗り越え方も同じだと思います。まずは、疑問に思うこと。ただ『ハングル語』と日本語って似てるよね』ではなくて、「韓国も中国も毎年8月になると日本に対してうるさいね」ではなくて、「どうして」、と考えること。その「どうして」が、新しい声を聞き入れること、進んでは「歴史の壁」を乗り越えることにつながるのでしょうか。タイトルとは違って、それは決してやさしくはないかもしれません。新しい声を聞き入れることは、今まで培ってきたわたしたちの知・言語・世界を転覆させ、頭を（時には心をも）痛くさせるからです。「ただヨン様が/JPOPが好きだけなのに…痛いのは嫌!」という方もいるでしょう。そういう方にわたしはあえて言いたいです。「せっかくだから、もっと深入りしてみない?」と。ふわふわ仲良くするだけでは、いつまでも未来への一歩は踏み出せません。たとえやりたくなくてもね（笑）。そろそろ踏み出さなければならない時がじきに来ます。実に無粋な理由ではありますが、ご存知の通りドルの価値は日々下落しアメリカ経済は低迷を続けています。東アジアの国々もいずれ訪れるドルの崩壊に備え、ドル依存・アメリカ依存の経済体制を見直し、ヨーロッパのような新しい形の政治経済共同体を作らなければならないと言われていています。もちろんわたしは無粋な理由ぬきでも、あえて皆さんにお誘いしたいのです。「やっぱり、せっかくだからもっと深入りしてみませんか?」と。

当会イベントにボランティアスタッフとして参加下さった方(敬称略)

11月8日 ニュースレター31号 発送作業要員

安井将人・永井茜・金慧源・金慧珍・金仁淑・佐藤裕美子・南塚由美子・浦睦世・溝江有里子

12月19日 第11回ビビンの会 グループリーダー

イミジン・キムジユン・パクノミン・秋山卓澄・小森新・島田涼子・高藤里紗・平野真衣子・前田芳孝・横田麻未
吉原海・李文凱

12月27日 年賀状宛名書き

千葉まゆみ・佐藤由美・原口彩・小橋公子・南部真喜子・北村宏大・竹嶋梓・赤塚友梨恵・篠田由希・
竹田七奈子・宇賀神瑛子・山本涼子・森田冴美・井上茉稀

09年11月3日～10年1月9日に会費・ご寄付を下さった方 敬称略・別枠を除き五十音順

縣 勇兵	語ろう会	田中 慶子	中川 敦司	古川 起與子	森 健造	若宮 英生
大塚 紀子	川辺 寛子	田村 敏彦	長島 和子	堀内 和子	谷池 教子	渡辺 京子
大町 卓也	工藤 早苗	丹下 誠司	中田 邦雄	堀場 秀亨	山口 忠正	渡部 友理恵
小川 昭子	曾根 文子	チラタ会	比嘉 房雄	松田 明美	山越 栄子	渡部 澄江
小川 裕美	高柳 直正	佃 吉一	福島 忠男	満井 啓二	吉田 美夏子	

日本聖公会 川越キリスト教会

ご入会・ご寄付のお願い

活動会員:年会費 5,000円(学生、未成年者 2,000円)
賛助会員:年会費1口5,000円(学生、未成年者 1口2,000円)
法人会員:年会費 1口10万円
ご寄付:2,000円以上おいくらでも

<郵便振替口座>

口座番号 00180-2-25153
口座名 日韓アジア基金

- ・活動会員:活動に積極的にご参加頂ける方。総会での議決権がございます。
 - ・賛助会員:定期的にご支援頂ける方。
- ご支援下さった方には「日韓アジア基金ニュースレター」をお届けします。

<お問合せ先> (日本語でお願いします)

〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-13 アジア文化会館(ABK)内
Tel:090-4456-2942(庶務・会計担当 大澤) FAX:03-3946-7599(ABK)
E-メール: jkaf@ml.infoseek.co.jp
HP: 検索サイトで「日韓アジア基金」で検索なさって下さい。
発行人 特定非営利活動法人 日韓アジア基金・日本 代表理事 江本 哲也